

広島県万葉歌ノ一ト

——備後と安芸——

森

斌

目次	序	I	II	III	IV
	備後の国	深津島山	備後神島	鞆の浦	長井の浦
1	3	3	5	9	11
					安芸の国
					風速
					長門島
					夜の船出
					山陽道安芸
					24
					17
					14
					14
					12
					11
					9
					5
					3
					3
					1

広島県とは、万葉の時代で言えば二つの国から成り立つ

ている。備後と安芸である。吉備の国は、備前、備中、備後という三つに分かれた。古墳時代までは巨大な国であり、三次の風土記の丘も吉備のはずれにあたる。その当時の安芸国などは、吉備の国と比較にならない。越国、陸奥国などが特別な存在であるように、吉備国の強大であることも自ずと理解できる。ここでいう広島は、広島市を含めた備後と安芸の国である広島県を指す。

たまたま天平八年六月（新暦七三六年七月末か、八月の上旬）に新羅使が広島海を通過した。そのために船舶した土地で歌を詠んでいる。海は、路であった。

万葉の時代とは、七世紀と八世紀の時代である。そのころの広島は庶民はどうであったか、と言えはなかなか資料がない。分かるのは平城京に居た貴族である。また現在の庶民を知りたくても、その実態は複雑である。まして古代

の庶民などは、どこまで住居の規模、一家族の単位、年収、さらに税金などを現代における評価として再現されるのであろうか。その当時の人口五百万とすれば、備後と安芸にはどれほどの人が住んでいたのであろう。安芸が注目されるのは、平清盛が安芸守になって、後に厳島神社が発展して以降である。平城京の住民十萬すら直接的な意味で言う根拠のない数字である。奈良は、二〇一〇年に平城遷都千三百年紀を迎えた。

広島の方葉歌は、瀬戸内海を航海した遣新羅使の存在があつて豊かなものになった。一方、山陽道の万葉歌は極めて限られている。さらに、安芸の山陽道は、西広島市国分寺跡付近を除き、安芸府中から大竹にかけて遺跡が見つかっていない。当時国道一号線であつた山陽道は、安芸の国の西部はいつたいどこを通過していたのであろう。安芸郡は、和名抄（元和三年木活字版二十卷）に漢弁、弥理、河内、田門、幡良、安芸、舟木、養隅、安満、駅家、宗山とある。佐伯郡は、養我、種篁（平良）、緑井、若佐、伊福、桑原、海、嚙濃（濃畠か）、建管、駅家、大町、土茂とある。とすれば、安芸府中除き、その西は駅家が大町、土茂の二カ所であり、さらに延喜式を加味して周防の石国（岩国）につながつた山陽道が想定される。安芸・佐伯郡の駅家名

としては、伴、大町（利松、安古市大町）、濃畠（のお）、遠管（私訓をたけ）が延喜式を加味して駅家の名前である。しかし、山陽道の一般的な常識は、海岸線を避ける。ところが安芸の山陽道はこれまでの定説を踏まえない。

遺跡が発見されていないのであるから瀬戸内海に沿つたのか、或いは海の見えない山間道であるのかが問題である。伴（土茂）、大町、種篁（平良）は地名が現在まで残つたか、或いは連想される地名が指摘できる。問題な

のは、濃畠と遠管である。さらに万葉集には和名抄・延喜式に駅家として地名のない「高庭」(たかには・たかば)が登場している。また、備前・備中・備後三国の駅家数と安芸はほぼ同じで、安芸は十三の駅家があった。周防でも十から八に数が減っているのであるが、安芸国は大同二年以後延喜式まで駅家の数が一定である。

これから紹介するのは、広島即ち、安芸と備後で作られた万葉歌の紹介である。人の心はなかなか本当のことが分からないにしても、寂しい、嬉しい、悲しい、楽しい、不安である、さらに恐ろしい心情を言葉に託した人々の思いを深く知ってみたい、ということから古典文学との触れ合いが生じる。

I 備 後 の 国

きびのみのしり

備後とは、山陽道の一国であり、山陽道に沿って言えば現在の福山、尾道、三原等の市が含まれる。特産品としては、備後表、備後砂、備後もの(刀剣)などが知られる。延喜式によれば、京都から国衙のあった府中まで七日の陸路旅であった。府中は、現在府中市になっている。川は芦田川があり、その下流に福山平野が広がっている。東西の潮は、福山沖で合流するのであるから、瀬戸内海の中央と

いうことになり、干潮で東西に流れる潮に乗る出船として、満潮で東西から瀬川に潮が集まるので入り船として賑わったのが福山市の港である。瀬は、江戸時代の朝鮮通信使に日東第一の景観と呼ばれたこともある。

万葉時代の備後は、府中市が中心であった。川船を利用すれば、瀬戸内海へ自由に通行出来た。但し、現在の福山市は、埋め立てなどで古代と一変していることと福山湾の奥にどの程度の広がりを持つ内海があったのか、はつきりしない。さらに神辺の海とでも言う内海があったので、福山市付近の複雑な潮流も想像される。

A 深津島山

人麻呂歌集に次の歌がある。

1 道の後深津島山しりふかつしまやましましくも君が目見ねば苦しかりけり
(十一・二四二三)

【口語訳】 備後国の深津島山、しばらく貴方にお会いしないのでつらいことですよ。

現在の福山市の平野部が海であつたらしいことは、福山城天守閣から東西、そして南に視線を向ければほぼ確認で

きる。福山城の南にはいくつかの丘が見えているが、それらは福山湾にあった島であろう。

和名抄には、備後の国に深津郡と安那郡があり、景行紀に安那郡に「穴の海」があることと深津郡に「中海」があるとしている。

人麻呂歌集にある深津島山について、下田忠氏は、『万葉の歌人と風土（中国・四国）』（七一頁）で昔福山湾にあった半島であるとして、「西深津町、東深津町に町名をとどめる」としている。また正保年間（一六四四から一六四八）ころに、福山藩により干拓が行われ、半島の姿が消えたのであろう、としている。「島山」とは、海上から島のように見える所を言うのであるから、半島なども適当であるし、或いは海岸線にある山塊でもいい。もちろん島であっても良いが、ここでは半島にある山を言ったことになる。地球が丸いので海上からは島にある山とも見えるのであろう。吉備の児島は本来島であり、瀬戸内海にあった島である。それが人間と自然の営みで本州につながった。元々島でありながらさらに有名であるのは、島根半島である。出雲風土記に国引き神話としてその誕生が語られているが、出雲大社ももとは島にあった。島根半島は、斐伊川による堆積で陸続きになった。水に臨んだ地にある山であるから、

深津島山とは瀬戸内海に臨んだ半島であったと確認出来る。現在町名に深津がのこっているが、福山城からは残念ながらビル等もあって面影がはっきりしない。ビルと道路、さらに干拓が深津島山を消失させた。問題は「道の後」とだけありながら、備後と決められることである。瀬戸内海であれば、播磨、安芸、周防、伊予、讃岐にせよ、それらの国を分割した歴史はない。三次市にある広島県立歴史民族資料館には、古墳が敷地に多数ある。古墳時代の遺跡と言うことになれば、備後の国が圧倒的に安芸に勝つて多い。

ちなみに窪田空穂評釈は、若い頃の人麻呂の作品としている。それに対して都から遠い固有名詞を歌にうたうのは、地方の歌であるからということも考えられる。土屋文明私注は旅行者の作と思えないとしているが、窪田評釈の序詞が巧みであるということも配慮されていいことである。即ち、「しま（島）」と「しま」との類似から序詞として誕生したのであろうが、そこには稲岡耕二全注のいう「愛すべき」表現として「君が目見ねば苦しかりけり」がある。

中西進訳注は、「苦し」を不如意な状態と説明する。どこまで地名の「備後国の深津島山」が体験的なものか、不明であっても、「しま」が第三句の「しまし」と音が類似している初句と第二句が序詞になっている一首である。この歌

では、道の後とあつて、瀬戸内海では国を分けているのは吉備のみであるから、備後が適當である。さらに備後と限定しなくても、「道の後」そして「深津島山」と続くのであるから、都から遙か離れた遠い処という雰囲気「深津」で強められる。上二句が序詞であり、かつ地名を意味しているのであるから、せいぜい播磨までが聖武天皇行幸地であり、斉明天皇の新羅遠征などの過去の出来事からすれば、備後とは遠い国である。しかも、現在の福山付近は内海が入り組んでいたらしく、潮流も複雑であり、且つ瀬戸内海の丁度真ん中に位置している。それらを踏まえて上二句は「しましくも」というのであるから、君に逢えない寂寥する日々の長さを感じさせている。

B 備後神島^{かみしま}

神島は、二説ある。一つは岡山県笠岡市神島（こうのしま）である。一つが福山市神島町（かしま）である。現在は、どちらも島ではなく、陸続きになっている。調使首の題詞に「備後国の神島」（十三・三三三九）とあり、遣新羅使の歌に「神島」（三五九九）とある。この神島がいったいどこが適當であるかと言えば、万葉にはつきり備後とあるので、地理的に福山の神島が適當である。笠岡は備中であ

るから、その神島（こうのしま）も備後ではない。さらに海辺の行路死人歌であるから、写真よりも類型的な形式ということも配慮されるのでどこまで実景を配慮するかということがあつたとしても、「恐きや 神の渡りの」とあり、その背景に「高山を 隔てに置きて」とあるので、古代に「穴の海」が福山の北にあつたとされることも踏まえて、福山市神島町が適當であろう。海難の恐怖などは、潮流の複雑な場所が適當である。笠岡市の神島では、北現在が陸続きになっているが、本州と島の間も、或いは島の高山と島の南を流れている海流も、現在とそれほど変わって居ると思えない。現在は、笠岡の神島にせよ埋め立てているので、昔の姿を高台に登って確認するしかないが、それなり大きさを持つていた福山湾と備中と備後の国境、即ち鞆の浦沖が東西の潮流の境と重なることも加味されて複雑な海域である。さらに芦田川の河口等などの条件や複雑な深津半島を配慮すれば、笠岡の神島より適當な「神の渡り」があつた想像される備後神島となる。

さて、瀬戸内海には無数に大小の島がある。無人島を除けば定住者のいる島は二百もない。それらの島の名称は、古代と同一でないであろうが、現在神島と呼ばれる人の住む島はない。地名に神島があつても、すべて陸続きになつ

た。現在呉市に鹿島があり、人が住んでいる島では広島県の最南端である。音戸、鹿島大橋で本州とつながっているが、「かしま」とは「神島」が元々で、当て字で鹿が当てられた可能性もある。その他、人の住んでいる神聖な島名には「厳島」「祝島」がある。

ちなみに神島というので

あるから神のいる島であつたのであろうが、土地の神はどこにでもいるのであるから、名前の由来は特別な祭祀と関わつた島であらう。福山も笠岡も神島に祭祀跡は見つかっていないが、笠岡市神島の南にある高島の高島遺跡が祭祀跡のあることを、下田忠氏は『万葉の歌人と風土（中国・四国）』で紹介している。



福山市神島

備あづみののしりのたて 後国の神島の浜にして、調使首、屍つかのおみのおびと かばね

を見て作る歌一首（并せて短歌）

2 玉梓たまきの 道に出で立ち あしひきの 野行き山行き

にはたづみ 川行き渡り いさなとり 海路に出でて
吹く風も おぼには吹かず 立つ波も のどには立たぬ
ぬ 恐きや 神の渡りの しき波の 寄する浜辺に
高山を 隔てに置いて 浦ぶちを 枕にまきて うら
もなく 伏したる君は 母父が 愛子にもあらむ 若
草の 妻もあるらむ 家問へど 家道も言はず 名を
問へど 名だにも告らず 誰が言を いたはしとかも
とる波の 恐き海を 直渡りけむ（十三・三三三九）

反歌

3 母父おもちちも妻も子どもも高々たかたかに来むと待つらむ人の悲しさ
（十三・三三四〇）

4 家人の待つらむものをつれもなき荒磯をまきて伏せる

君かも（十三・三三四一）

5 浦ぶちに伏したる君を今日今日と来むと待つらむ妻し

悲しも（十三・三三四二）

6 浦波の来寄する浜につれもなく伏したる君が家道知ら

ずも（十三・三三四三）

【口語訳】（玉梓の）道に出で立つて、（あしひきの）野山を行き、海のような川を行き渡り、鯨を捕る海路に出て、吹く風も激しく、立つ波も重なる。恐れ多いことよ、神の渡りの、折り重なり波が寄せる浜辺に、高

い山を隔てとしてあり、沖の藻を枕として、心もなく横たわっている君は、母と父が愛する子供であらう、（わかくさの）妻もいるのであらう、家を聞いてもその道を告げず、名前を聞いても名乗らず。誰の言葉を心配しているのか、うねり立つ波の恐ろしい海を渡りきろうとした。

反歌

【口語訳】母と父、妻も子供も、期待して帰宅を待っているだらうこの死者の悲しいことよ。

【口語訳】家にいる人が待っているだらう貴方、どうして縁のない荒磯を枕として横たわっているのだ。

【口語訳】沖の藻に横たわっている貴方を、今日今日と帰宅を待つ妻は悲しいことだ。

【口語訳】浦波の寄せる浜に、一人で横たわっている貴方の家の道が分らないことだ。

行路死人歌と呼ぶ挽歌が万葉にある。この名称は近代人が付けた。旅の途中で死んだ人を、見た人が悼む挽歌である。巻十三には、挽歌として二十三首まとめられている、その中で九首が行路死人歌になっている。それは、旅での横死を第三者が悼み、故郷と旅を比較する方法で歌を詠ん

でいる。それを特別なものとして挽歌の部立にありながら、さらに行路死人歌と呼称している。備後の歌は、海辺であるから、船の遭難による死であらう。

作者調使首は、万葉に長歌一首と短歌四首を残すのみであり、調氏か、調使氏か、不明である。行路で死去した場合、特別に扱われたらしい。大化の改新以後律令国家として地方と都との往来が盛んになりながら、旅の途中で横死してしまう人が頻繁になった。また、それをその里の人々が忌み嫌ったので、国家ではその対策として里の人が弔うように勅が出された。

行路死人の歌の様式があつて、家で無事を祈る家族を思い、その家族の代理としてうたう。この行路死人歌の特徴は、子供の登場にある。母と父、妻は登場した。万葉の防人歌では、案外子供が例外的に登場する。単独はもちろんなく、母などとペアである。ここでも単独で子供が悲しむだらうということはない。父と母のいる成人した子供として死人を登場させている。山上憶良は、その代表作である「貧窮問答の歌」（五・八九二）で父母も登場させるが、ここでは、さらに若い妻の存在まで触れる。最初の反歌では、父母、妻と子供をうたうが、三三七番とはほぼ同文である。さらに特徴としては、反歌が全て家にいる人が焦点になっ

ていて、親、妻子の旅人の無事を祝う気持ちを裏切っている死者も向けられていることである。長歌が旅での水死を悼み、反歌四首が裏切られる家にいる親、そして妻子に同情している。伊藤博積注は、長歌が「家人から死者」、反歌が「死者から家人」の順にうたわれていて、整然と統一されていることを指摘する。巻十三で作者を記している点や整然とした構成などは、案外新しい歌であるかもしれない。

この行路死人歌を読むとき、杜甫の「兵車行」の一節を思い浮かべる。「君見すや青海の頭、古来白骨人の収る無きを」とあるが、無名の兵士がいかにか死を迎えても悼まれもせずいたのか、その様を驚愕させる描写である。それらの名も無き兵士は「耶嬢妻子走りて相い送る」というのであるから、両親と妻（妻子とは妻の意味であって、子供は登場しない）が追いかけて見送るのである。

万葉集では、旅は故郷の家で無事の帰宅を願う家族は身を清めて待つ。或いは、旅行く人の着ている下紐を結び、安全を祈る。旅の途中で死去が伝えられた青年に触れて、山上憶良には「熊凝がためにその志を述ぶる歌」（八八六から八九一）がある。但し、これは「大伴君熊凝が歌二首おほともきみとこり」（八八四、八八五）に敬和したものである。作歌の事情は、「大伴君熊凝は、肥ひのちのしめくにもよき後国益城郡

の人なり。年十八歳にして、天平三年六月十七日を以て、相摸すまのつかひ使某国司官位姓名の従人となり、京都に参る向かふ。天に幸あらず、路に在りて疾やまひを獲、即ち安芸国佐伯郡高庭の駅家うまやにして身故りぬ。」とある。

遣新羅使の歌でも神島がうたわれている。

7月説つくよみの光を清み神島の磯回いそまの浦ゆ舟出す我は（十五・三五九九）

【口語訳】航海の神月の光が美しいので、神島の磯から船を出すよ。私は。

天平八年（七三六）六月の十日前後であろう。八世紀の瀬戸内海の難波と大津（福岡市）とは、一月ほどの航海である。従って、六月上旬に難波を出帆していれば、旧暦の十日前後の月である。新羅使は備後神島を夜に船出した。目的地はおそらく備後長井浦（三原市糸崎）であろう。現在には三原市糸崎神社の近辺であろう。航海の距離は芸予諸島のどこを通過するかで違いが出てくるが、一般的に本州海岸に沿って航海しているらしいので、福山市鞆の浦、尾道水道か、向島南を通って三原市糸崎まで四十キロほどであろう。旧暦の六月であるから梅雨も終わっていたであらう。

う。真夏の海の暑さが感じられる。そこで、航海の神である月夜の出港が試みられたのであろうか。

この夜の出帆は、特別であり、新羅使で確認できるのは、神島から長井の浦、長門島（呉市倉橋島本浦）から麻里布の浦（岩国市麻里布町）の航海で試みた二回である。旧暦の六月であるから猛暑である。涼しい夜の航海も当然配慮されていていい。くわえて神島は備中から備後の国に変わった最初の寄港地である。当然物資、船乗りの交代も変更もあつたであろう。国司の援助も多岐にわたっていたはずであるが、基本は食料、水主の確保、海難の予防という観点からは備後の海人の助力は欠かせない。また、夜の出港を嫌った当時の考えからは、特別な理由があつて夜の航海もして遣新羅使を現在の三原市糸崎にあつた長井の浦へ送り届けた、ということも考えられる。

遣新羅使については、伊藤博氏の『万葉集釈注（八）』（二十四頁から二十六頁）に詳しい。第一回が大化二年九月に始まり、宝龜十年に第二十七回で終えている。季節では一月から五月、七月から十月にかけて拝命や派遣が行われている。春と秋が季節的に出発の適当な季節であるが、当然往復には半年を費やす大旅行である。天平八年は、二月二十八日拝命、四月十七日拝朝、そして予定では四月下

旬に出帆であろうが、実際の出発は六月上旬である。拝朝から一月以内で出発がほぼ原則であるから、六月に難波を出帆していることは何らかの遅れた事情があつたことになる。帰任は翌天平九年一月二十六日であり、帰京となる。大使は帰路対馬で病没、副使も対馬に三ヶ月ほど過ごし、遅れて帰任している。国家の全面的な支援を受けていた天平八年の遣新羅使も周防佐波の海で遭難した。往路の歌は多数ありながら、帰国の歌は、往路百四十首に対して五首である。東瀬戸内海である家島で詠んだ歌であつた。

C 軻の浦

現在福山市にある軻の浦では、大伴旅人の次の歌が著名である。8歌碑は、広島県で最も古いものであつたが、現在新しく作られていて対潮楼の近くに置かれている。

天平二年庚午の冬十二月、大宰帥大伴^{だざいのそのおとものまへつきみ}卿、京

に向かひて道に上る時に作る歌五首

8 我妹子^{わきも}が見し軻の浦のむろの木は常世^{とこよ}にあれど見し人そなき（三・四四六）

9 軻の浦の磯のむろの木見むごとくに相見し妹^{いも}は忘れえめやも（三・四四七）

10 磯の上に根延ふむろの木見し人をいづらと問はば語り
告げむか（三・四四八）

右の三首は、鞆の浦に過る日に作る歌

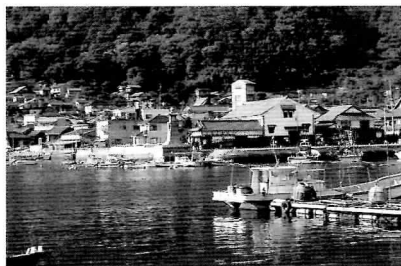
【口語訳】 愛しい妻が見た鞆のむろの木は、長い命を保っているが、その木を見た妻は亡くなった。

【口語訳】 鞆の浦の磯にあるむろの木を見るたびごとに、一緒に見た妻を忘れることはないだろう。

【口語訳】 磯のそばに根を張るむろの木よ。それを見た人がどこにいるかと聞いたら、むろの木は（誰かが）答えてくれるのであろうか。



鞆の浦万葉歌碑



鞆の浦

旅人の歌は、妻の死を悼む挽歌である。旅中に大樹や霊木を見て安全を祈願したりするのは旅人と妻だけが行った訳ではない。古代英雄のタマトタケルも古事記歌謡で「尾張に 直に向かへる 尾津の崎なる 一つ松」とうたい、忘れた太刀が無くならずにあつたことを感謝している。「むろの木」（イブキ、ネズカ）は、旅の安全を見守る霊木であつたことになる。それを旅人は、「見」に拘っている。「見し人」「見むごとに相見し妹」「見し人」と見たというのであるから、亡妻への思いは強かつたことになる。四四八番は、解釈が分かれていて、むろの木か、或いは他の人が答えるのか、ということである。翌天平三年（七三一）に六十七歳で旅人は死去していて、老をむかえた悲哀が歌の背景にある。

その他として次の四首も鞆の浦をうたう。

11 海人小舟帆あまをぶねほかも張れると見るまでに鞆の浦回うらみに波立て

り見ゆ（七・一一八二）

【口語訳】 海人の小舟が帆を張っているかと思えるほど、鞆の浦あたりに波が立っているのが見える。

12 ま幸さいくてまたかへり見みますらをの手に巻き持てる鞆の浦回うらみを（七・一一八三）

【口語訳】無事にまた戻って来て見よう。丈夫の手に巻いている鞆、その名前の鞆の浦みを。

13 離磯^{はなれそ}に立^たてるむろの木^きうたがも久しき時^{とき}を過ぎにける
かも (十五・三六〇〇)

【口語訳】離れた磯に立っているむろの木は、本当に長い年月を経たことであるよ。

14 ししましくも一人あり得るものにあれや島のむろの木離れてあるらむ (十五・三六〇一)

【口語訳】暫くでも一人で居ることができるのであろうか。島にあるむろの木はなぜ独りでいるのであろう。

鞆は、瀬戸内海を中心にあり、満潮で東西の潮が集まる干潮では瀬戸内から太平洋日本海へ潮が流れるので、東西に向かつて船旅するときに絶好の港である。また、鞆の浦はむろの木が有名であった。

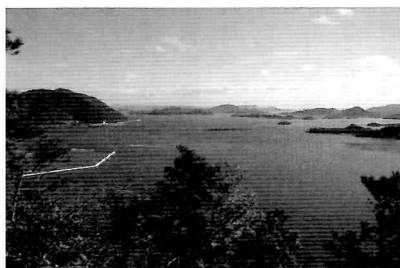
D 長井の浦

備^{きびのみのしりなが}後長井の浦とは、現在は三原市糸崎付近のことといわれる。備後と安芸の国境に近い港である。現在の糸崎神社は、海の埋め立て等で海岸から離れている。しかし、嘗ては国道二号線もなかったであろうから、広島でも最

大の楠が糸崎神社の境内にあるごとく、海岸線近くの神社である。この一体を俯瞰するためには、三原市筆景山に登るのが一番である。

標高三百一十一メートルの山頂からは、尾道水道と糸崎が東に見えている。遣新羅使が神島か、或いは鞆から出帆していたとすれば、沼隈半島に沿って尾道水道か、

或いは向島と因島との間にある布刈瀬戸を通じて長井の浦にやってきたのであろう。福山市神島からであれば糸崎まで四十キロ程度である。糸崎の沖に無人島がある。新藤兼人監督が「裸の島」のロケ地宿弥島である。瀬戸内海には、井戸すらない無人島でありながら、人々の記憶に残る島がある。万葉歌碑は、17が糸崎神社にある。



筆景山から東方

備後国水調郡^{みづなづ郡}の長井の浦にして船泊まりする夜に
作る歌三首

15 あをによし奈良の都に行く人もがも草枕旅行く舟の泊

まり告げむに「旋頭歌なり」(十五・三六二)

右の一首、大判官

16 海原を八十島やそしまがく隠り来ぬれども奈良の都は忘れかねつも
(十五・三二二三)

17 帰るさに妹に見せむにわたつみの沖つ白玉しらたまのり拾ひて行かな
(十五・三二一四)

【口語訳】(あをによし) 奈良の都に行く人がいてほしい。(くさまくら) 旅行く船の今宵の泊まりを告げられるのに。

【口語訳】海原を沢山の島陰を通して来たが、しかし奈良の都は忘れられない。

【口語訳】帰ってから妻に見せようものを。海の沖の白玉を拾っていこう。

作者の一人大判官とは、壬生宇太麻呂である。六月早々に難波を出帆していても、十日ほどの船旅を経ていた。ここでは既に心は後ろ向きになっていて都に向いている。真夏の航海であるから暑さが大敵である。遣新羅使の歌群は万葉卷十五の前半にある。記録としては、備後長井の浦から実録風の旅歌日記になっている。難波出発から備後までの往路は、歌を記録しようとして日々の流れに沿っ

て歌をまとめていく傾向が強い。しかし、遣新羅使巻頭の十一首(三五七八から三五八八)は、歌の素材として、或いはうたう動機として秋には無事妹のいる故郷に帰宅したいという主題である。

当然この主題からすれば、出発から十日前後しか過していない船旅であつても故郷が懐かしい、或いは妹が恋しいというたうのも当然であつた。

II 安芸の国

安芸の国とは、今の広島県西部を占めている。東から竹原、呉、西広島、広島、廿日市、大竹の市を含む山陽道の国である。延喜式によれば、京都から国府まで八日の日程を要した。川は太田川が中心であり、その下流に広島平野が広がっている。広島湾は、瀬戸内海でも最も干満差の大きい湾である。海の牡蛎と陸の柿が有名である。古代の国守は、赴任の旅をした。十世紀初頭に成立した延喜式には、安芸の国は陸路八日、海路十八日とある。

朝鮮通信使(第十二回は対馬まで)が江戸時代に十一回往復した瀬戸内海航路で下関から兵庫県室津までの行程で御馳走所(接待箇所)を一日で渡った成功例が何回あったのかを紹介する。朝鮮通信使の研究は、呉市下蒲刈町の歴

史学者柴村敬次郎氏が泰斗である。その業績に基づき紹介すれば、十一回の往復であるから、回数としては二十二回の航路数となるが、案外成功例が少ない。

下関～上関（三十五里） 成功例四回

上関～蒲刈（二十里） 成功例八回

蒲刈～鞆（二十里） 成功例十一回

鞆～牛窓（二十里） 成功例九回

牛窓～室津（十里） ほぼ成功

瀬戸内海でも東部と西部では、異質な海であった。東部は波静かな内海であるが、西部は荒々しさを示している。船の航路日程でも、風波と島嶼の複雑な海流に翻弄されるのが周防、安芸、備後の西国である。

牛窓の次が十里で室津であるが、それよりも東の室津と兵庫（十八里）、さらに兵庫と大坂の間（十里）は、ほぼ予定通りに一日の航海している。上関から牛窓まで二十里平均の御馳走所の間隔である。ちなみに遣新羅使で知られるのは、備後神島（現福山市神島）備後長井の浦（現三原市糸崎）安芸風速（現東広島市風早）安芸長門（現呉市倉橋町本浦）周防麻里布（現岩国市麻里布）のそれぞれの間は、

平均四十キロ程度である。

江戸時代は、周防から備前までは八十キロ間隔で御馳走場所が設けられていたが、一日で達成した朝鮮通信使の成功例が少ない。船の性能としては布帆による強力な推進力もあり単純に比較にならないにしても、古代は、新羅使人が備後・安芸・周防で宿泊した港を配慮すれば約倍の日数の航海であった。このことからその行程をどういった速度で渡っていったのが問題になる。カッターのスピードは、毎時四ノットを出せるという。しかし、これは荷物を積んでいない。平成十七年度に試みられた実験によれば、古代船海王（十数トン）は、六頓あまりの石棺を積んだ台船を引いて八百五十キロを三十日かけて走破した、と八月二十七日の朝日新聞が伝えた。しかも、この達成は毎日十数人の漕ぎ手の船員を入れ替えた成果を踏まえている。平均すれば、一日三十キロ弱の旅である。これからも倉橋島から岩国市麻里布までは、約三十五キロあるのであるから、漕走だけから言えば一日分の航路に十分匹敵する。また、最大で毎時十ノットを記録する潮流の大島鳴門の問題だけで言えば、麻里布は広島湾と言っても良いほどかなり北上した場所にある。大島のそばにある港に行くのも、麻里布に行くのも長門の浦（倉橋町本浦）からの距離はそれほど

変わらない。また、本浦からは麻里布が山陰に隠れ、むしろ南方には十数キロ離れた周防大島（屋代島）の東端が海岸からも見えている。

A 風速（万葉表記 現在東広島市安芸津町）

現在も地名として残っていて、呉線にJR風早駅もある。呉線仁方から三原までは、海岸線を通っている処では、景観として芸予諸島が美しい。とりわけ野呂山からの眺めは扶桑第一と呼びたくなる。或いはエデンの海と呼ばれる忠海や竹原からは、地中海もこのように美しいものであるかと想像してしまう。そこは異国にいる雰囲気があったよってくる。

天平八年六月の十日前後であろうか、遣新羅使は安芸の国風早で歌をうたった。万葉18 19の歌碑は、風早祝詞山八幡神社境内にある。

風速の浦にして船舶まりする夜に作る歌二首

18 我が故に妹嘆くらし風早の浦の沖辺に霧たなびけり
(十五・三六一五)

19 沖つ風いたく吹きせば我妹子が嘆きの霧に飽かましもの
(十五・三六一六)

【口語訳】 私のために妻は嘆くらしい。風早の浦の沖で霧が棚引いている。

【口語訳】 沖から吹く風であれば、わが妻の嘆きの霧に触れて満足するものを。

現代人にわかりにくいのは、息が霧になることであろう。妹の嘆きが風早沖で霧になったという。息（生き）は命と結びつく言葉である。妹の嘆きの激しさを思い知る歌である。嘆きが命なのであるから、霧に包まれないと願うのは、率直な願いである。この歌には出発に妹がうたった歌の背景があつて、

君が行く海辺の宿に霧立たば我が立ち嘆く息と知りませ
(十五・三五八〇)

と呼応している。

B 長門島（現在呉市倉橋町）

長門島は、現在の呉市倉橋島である。音戸ノ瀬戸が開削されるまでは、なかなか古代に広島湾は航海の対象になりにくかった。西征する船は、早瀬瀬戸を通過するために倉

橋島を大きく迂回して安芸府中近くの港に入ったのであらう。音戸ノ瀬戸はその意味では、安芸の港を東西につなげる最短の方途であつた。平清盛の音戸の瀬戸に伝えられた開削の伝説も頷かれる。20から27までが刻まれた巨大で立派な万葉歌碑は、万葉遺跡長門島松原公園にある。また、犬養孝氏の揮毫による歌碑も万葉植物公園にある。

安芸国の長門の島にして磯辺に船舶まりして作る
歌五首

20 石走る瀧もとどろに鳴く蟬の声をし聞けば都し思ほゆ
(十五・三六一七)

右の一首、大石蓑麻呂

21 山川の清き川瀬に遊べども奈良の都は忘れかねつも
(十五・三六一八)

22 磯の間ゆ激つ山川絶えずあらばまたも相見む秋かたま
けて (十五・三六一九)

23 恋繁み慰めかねてひぐらしの鳴く鳥陰に廬りするかも
(十五・三六二〇)

24 我が命を長門の島の小松原幾代を経てか神さび渡る
(十五・三六二一)

【口語訳】(石走る) 滝もとどろくほどに鳴く蟬の声を

聞くと、人の多い都が偲ばれる。

【口語訳】山を流れる清らかな川瀬に遊んでも、奈良の都は忘れがたいことだ。

【口語訳】磯の間を激しく流れ落ちる山の川のように命も絶えずあれば、ふたたび妻にあえるであろう。秋近くになって。

【口語訳】絶え間ない恋い心を慰められないで、蜩の鳴く鳥陰で飯の宿りをする事です。

【口語訳】私の命を永くと願う長門島の小松原、どれほどの年月を経てこのように神らしくなったのか。

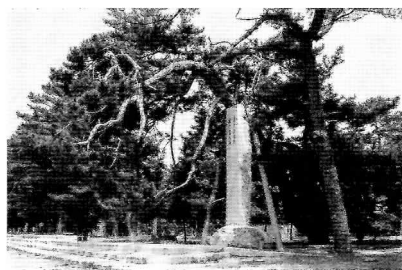
長門の浦より船出する夜に月の光を仰ぎ観て作る
歌三首

25 月読の光を清み夕なぎに水手の声呼び浦回漕ぐかも
(十五・三六二二)

26 山のはに月傾けばいざりする海人の燈火沖になづさふ
(十五・三六二三)

27 我のみや夜舟は漕ぐと思へれば沖辺の方に梶の音なり
(十五・三六二四)

【口語訳】月の光が清らかで、夕風に船頭が声を合わせて浦近くを漕ぐことです。



倉橋島万葉歌碑



倉橋島火の山から南方

【口語訳】山の稜線に月が隠れると、夜釣りをする海人の漁り火が、沖の波間に見え隠れるよ。

【口語訳】我々だけが夜に船を漕ぐと思っていると、沖の方から楫の音がする。

船泊すれば、歌をうたい、つれづれの慰みとした。古歌を披露するのも雅な遊びであった。当然その風土を踏まえて歌をうたう。京と異なるセミ時雨、或いは松原は旅情をつのらせていて、妹を思い出す。

さて、遣新羅使の歌群には、備後神島を出発するときに

詠んだ歌があり、そこでも夜の航海が登場している。但し、「月読の光を清み」(三五九九)とあり、出航に際して航海の神月が出ている夜である。

夜の航海を歌うのは、七夕歌を除くと案外例が少ない。遣新羅使に四首ほどが指摘できるが、万葉集からは次の歌が参考になる。

さ夜ふけて堀江漕ぐなる松浦舟楫まつらふねの音高とし水脈み早をみかも(七・一一四三)

珠洲すずの海に朝開きして漕ぎ来れば長浜の浦に月照りにけり(十七・四〇二九)

一般的には、万葉集で月がうたわれた歌を読む限りにおいて、昼間の航海が原則であったことを知る。例外的にたまたま予定の宿泊場所への到着が夜になった場合であり、あるいは夜になっても潮や風が適当であるので日中から航海を続ける場合もあったのであろう。問題は、新羅と対決する軍船と新羅に使いする船が船出として春三月と夏六月にそれぞれ夜の航海を試みていることである。額田王は「月までば」(八)とあり、時期・期日の意味でなければ、空に出てくる月と関わる。遣新羅使は、基本的に「月読の

光を清み」という状態で出帆しているのであるから、それは月夜である。

Ⅲ 夜の 船 出

月夜はどういう夜であつたのであろうか。簡便な灯りとしては松明程度であろう時代である。そもそも夜の外出としては、月夜が便利である。したがって月の歌、或いは月夜が相聞でも大切な日である。月明かりに照らされて外出するのである。闇夜ではままならない外出も月夜では自由になる。船旅でも同様である。明るい月夜であるから出帆も可能なのであろう。しかし、月夜はいくらでもあつたはずなのに、出帆の用例が極めて乏しい。瀬戸内海の例であるならば、遣新羅使の二群の四首と額田王の熟田津歌の一首となる。夜の航海と言うことではどちらも月がかかわる。遣新羅使の歌が「月読のひかり」（三六二一）と月の神である「月読」にこだわりのあるところからは、航海の神月の神の加護がある。

長門から麻里布での航海で詠んだ二首（三六二三、三六二四）は、月が山の端に隠れたため闇の夜になったときの恐怖を基としている。ちなみに一般的に巻十五の諸注釈は、夜の船出に関して冷淡である。

まず窪田空穂評釈は、「当時の航海では、天候次第で幾日も碇泊すると共に、可能であれば夜も航海を続けることは普通なこと」とあり、さらに「当時の航海は天候次第であつたので、海上が安全だと見れば、夜間でも、月光が頼り得れば発船したのである」とする。安全であり、可能であれば夜の航海もあつたことになる。土屋文明私注は、三五九九番では夜の航海に触れることがないが、長門島出帆を「海が穏やかなので、涼しい夜の航行を企てたものと見える」とする。新編古典全集、或いは伊藤博氏は、夜の船出説として吉井巖全注の指摘を頭注等で示す。吉井巖氏は、夜の航海を全注で科学的に捉えて理解を示している。

まず吉井氏は、「潮汐表」の昭和五十八年七月十七日（旧暦六月七日）を参考にして、論じている。まず三五九九番にある「神島」が広島県福山市神島町をその比定地であるとして、神島から鞆までが十キロメートルの距離とする。その十キロが夜の船出にさせたのは、鞆から長井の浦までの三十キロメートルあるが、鞆まで航海の便利な潮が午後八時から十一時過ぎまでであり、また翌日鞆から長井までの航海に便利な西流になるためには、午前五時から鞆を出発して正午の逆流になる東への流れが生ずるまでには

長井浦にたどり着いている、とする。三時間の南流、六時間の西流にのるために神島を夜の船出した、と言う。

さらに長門島の夜の航海については次の如くである。三六二四番の考から詳しく論証している。夜の航海になったのは、山口県岩国市麻里布浦でいったん休憩して、宿泊せずに南下、大島郡屋代島と玖珂郡大島との間の大島瀬戸を通り、三六四〇題詞にある熊毛浦（熊毛郡上関町室津）に至った長い航海であつたからとした。

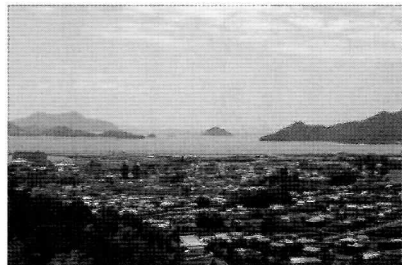
潮流については、昭和五十八年七月二十三日（旧暦六月十三日）として考えている。麻里布から南下するためには、午前七時半頃から潮流の転流する午後二時頃までが適当な時間であるとする。麻里布から室津までは五十キロメートルとして六時間の航海で可能であつたとする。二十三日は、日没が午後七時二十一分、月の出が午後四時三十四分、月の入り翌日の午前一時十分ということである。引き潮によつて南下して大島鳴門通過することは、下田忠氏も指摘する航路方法である。

但し、吉井説で唯一疑問とするのは船のスピードである。平均時速にして数キロは考えられるかもしれないにしても、八キロとか、九キロとかの時速が考えられていいのであろうか、という疑義である。

吉井巖氏も古代の航海において水手を力とする漕力（漕力）を、帆走よりも重要視している考えを取り入れている。このときの遣新羅使は、百人程度での一行であれば、約四、五十人が水手と言うことになる。船の大きさも百トン程度か、二百トンクラスであろうか。乗船している数が二百人であれば、その約半数が水手となり、船も二百トンクラスが必要になる。長さ三十メートル、幅約十メートルで吃水が三メートル以上あれば、船が二百トンであり、その一回り小さい船が百トンという。古典で参考にしたいのは、土佐日記である。土佐日記中で港から港で一番距離の



岩国城から東方



広島湾

長かったのは、土佐泊（徳島県鳴門市）から泉の灘までであろう。海賊は夜歩きしないといって紀淡海峡を渡った日である。それでも真夜中出帆しての航海距離は、最大で一日四十キロから五十キロ程度である。或いは、江戸時代の朝鮮通信使は、曳舟の存在や一般化した布の帆等によつて、奈良時代とは比較にならない風を有効にする状態であろう。瀬戸内海下関から大阪まで往復十一回試みられた航海日数が平均十六日である。そのときに御馳走場所として江戸幕府から宿泊場所の指定もあった。山口県が下関と上関、広島県が呉市蒲刈と福山市鞆、岡山県が牛窓、兵庫県が室津と兵庫、そして大坂である。その間で一番の長距離が百二十キロ程の上関と下関の間であり、その他は八十キロを超えない。岡山から東では、四十キロ程度の距離が多い。さすがに四十キロ程度の御馳走所との間は、一日でたどり着いているが、八十キロ以上離れるとそう単純なものではない。二日以上の日数で走破する場合がむしろ一般的である。とすれば、江戸時代の朝鮮通信使ですら、周防灘が最大で一日百二十キを、しかも周安芸灘から播磨灘までは、かなり形式的であっても八十キロを限度としている。鳥嶼が多い箇所は潮の流れも複雑である。また、奈良時代では帆も布ではなく、板か竹と考えられる素材であり、性能そのもの

のが違うのであるから、福山（神島）から三原（長井の浦）、三原から東広島（風速）、東広島から呉（長門島）、呉から岩国（麻里布）も大凡四十キロ程度であるから、その距離が妥当である。或いは、天候のことも配慮して一日平均二十キロ程度であったから平安時代に摂津五泊なのである。時速になおしても、梶だけでは大型船であれば時速二、三キロ程度である。そして、その基本に潮流、風などが加算された時速と言うことになる。せいぜい平均的には人の歩く時速五キロ程度が平均的なスピードであろう。風も潮の助けもないときは、時速二、三キロと言うことではないか。もちろん天候にも影響され、風が強すぎても、霧が発生しても航海に支障をきたす。

次に潮流の時間であるが、四日ずれば、干潮と満潮が約二時間ずれてくる。吉井氏の航海論理では旧暦の六月十日頃から十五日程度までが長門島の夜の航海に適していることになる。筑紫の館で七夕歌を作っているのが、一ヶ月ほどついでやして難波から那の天津まで航海していたのであるから、この時期はほぼ容認できるにしても、微妙な時間の問題が解決しているわけではない。四、五日のずれが許されないことは、伊藤穉注でも触れているが、潮流の時間ばかりか月が山の端に隠れる時間とも関わり、明け方ま

で月が天頂近くにおいては歌の理解にも齟齬が生じる。

瀬戸内海を夜に航海すると言うことであれば、額田王の次の一首が有名である。伊予・熱田津から那の国・大津を目指した。

熱田津に舟乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな（八）

直木孝次郎氏は、『夜の船出』に「船出には風が重視されたことを思うと、陸風・海風が規則的に吹く瀬戸内海の港では、これを利用して夜の船出が行われたとする仮説を、私は重んじたのである」と述べる。この発言は、額田王の歌に対するものであるが、「潮もかなひぬ」は「潮の流れも都合のよい方向に流れた」という意味に解するのがよいかもしれないとする。陸風と海風と言うことでは、瀬戸の夏は夕風で有名である。夕風は、七、八月の梅雨明けから旧盆にかけては辛く厳しい。暗くなる午後七時過ぎ頃から始まり深夜まで続く。陸風は深夜から規則的に吹く。その意味では、風も配慮して良い。

江戸時代には、オランダ商館長が「江戸参府」をしていた。このこともやはり朝鮮通信使の泰斗・柴村敬次郎氏が調

査しているので、参考に用いた。瀬戸内海のルートは、安芸・沖乗りコースといわれる経由で、下関―上関―家室―御手洗―鞆―牛窓―室―兵庫―大坂 となるか、防予諸島の家室から芸予諸島の鎌苅を経て本州沿岸を経て鞆を通る地乗りコースのいずれかが選択されている。とりわけ推進力として帆の威力であろうか、風のことは多く出てくるが、案外潮流は触れない。平均一週間ほどで下関から大坂まで着く。距離もおおよそ下関から大坂まで百三十五里程度である。その間では、周防灘である下関から上関が三十五里と長距離になり、あとは二十里を越えるものではなく、芸予から備讃の島嶼部では、十里前後で港の準備されている。江戸時代に百数十回の参府が試みられたのであるが、常夜灯、曳舟、早舟、様々な安全に対する配慮がなされているが、商館長などの日記には風のことが目立つ。

ちなみに額田王は、旧暦三月半ば頃の出帆と考えられる。遣新羅使三五九番は夏六月中頃と考えられている。季節は異なるが、熱田津から上関も長門の浦から上関も同程度の距離である。松山と上関とは、五十五キロ程の距離があり、ほぼ東西線上にある。遣新羅使の長門島（呉市倉橋本浦）からは、ほぼ南西に上関があり、途中に大島等があるので東に迂回したりするために、六十キロほどの航海距離

となる。松本清張氏は興味深い資料の存在を示した。江戸時代の国東半島にあった日出藩の参勤交代の行路は、国東から周防上関まで潮流に乗り、さらに上関から四国松山へ潮に乗って東航して、さらに備後福山、備前牛窓に、最終的には難波に至るというルートの紹介である。東征も西征も同じルートを日出藩は参勤交代で用いたともある。さらにこのことから松本氏は、『潮もかなひぬ』というのは、良い潮流を得たということになって」という理解に至っている。

このように見てくれば、現代と決定的な違いが古代の航海にある。現代の最先端技術を駆使して作られた旅客機でも、福岡から東京、或いは東京から福岡ではフライトに時間の相違がある。或いは舞鶴と小樽を結ぶ時速三十ノットも出せる高速フェリーでも、北行きと南行きでは時間に相違がある。

原因は偏西風と対馬海流である。現代では時間が余計にかかるとして航海の根本問題になるわけではないが、古代の船旅では、風と潮流は無視できない。対馬海流でも、或いは瀬戸内海の潮流でも海賊でもない限りそれを押し切つて逆らつての進行はあり得なかった。風も順風と逆風では航海が異なり、風待ち、潮待ちなど当たり前前の事である。

さすがに江戸時代のオランダ船は、夜間も、逆風も、潮流もそれなりに配慮していても、あえて逆らう航海も瀬戸内海で試みていた。しかし、布の帆であり、引き船の存在もあつて古代と同一に比較できない。風の方向、潮流の見定めがあつて航海していたのが万葉時代の瀬戸内海である。土佐日記には、風と波がお友達という表現まである。万葉集歌を参考に船舶まじりしたであろう瀬戸内の地名をあげる。

- 摂津 難波津（卷三・三一二等） 住吉の津（卷一・六五等） 猪名（卷七・一一八九） 武庫（卷三・二八三等） 敏馬（卷六・一〇六六等） 大和田（卷六・一〇六七）
- 淡路 野島（卷三・二五〇等） 銅飯（卷三・二五六等）
- 播磨 明石（卷七・一二二九等） 藤江（卷三・二五二等） 稲日（卷四・五〇九） 名寸隅（卷六・九三七等） 加古（卷三・二五二） 師磨（卷七・一一七八） 都田（卷六・九四五） 室（卷十二・三一六四） 家島（卷四・五〇九等）
- 備前 牛窓（卷十一・二七三二）

備中 児島（巻六・九六七等） 玉之浦（巻十五・三六二八等）

備後 神島（巻十五・三五九九等） 鞆（巻三・四四六等）

長井の浦（巻十五・三六二二題詞）

安芸 風速（巻十五・三六一五） 長門の島（巻十五・三六二一）

讃岐 狭岑の島（巻二・二二〇）

伊予 熟田津（巻三・三二三等）

周防 麻里布（巻十五・三六三〇等） 熊毛（巻十五・三六四〇題詞）

可良（巻十五・三六四二） 祝島（巻十五・三六三六等）

佐波（巻十五・三六四四題詞）

豊後 分間（巻十五・三六四四題詞）

瀬戸内海西征の一步と東征の終焉は、難波の津（大伴の御津）と住吉の津にはじまり、そして終わる。とりわけ難波津は、大陸を意識した国際港でもあった。阿倍仲麻呂などの遣唐使は難波から出発した。また、正倉院に収蔵されたものには、西域からの品もある。将来品も、鑑真和尚なども難波津で上陸している。特別な地方行政官司である撰津職は、天武六年（六七八）十月、丹比公麻呂を撰津職大夫にした記事が初見である。奈良時代の七世紀後半から八

世紀末まで撰津職が存在した。一方国内の西征の主要な目的地は、筑前那の津である。大阪と福岡が海路の東西起点であった。筑紫には、大宰府があった。どちらも諸外国の使節を歓迎する館がある。撰津とは、難波津、住吉津、武庫津を有する国である。難波の語源は、魚（な）庭（には）なのか、浪速（なみはや）の訛りと言う日本書紀が正しいのか、定説はない。殷賑を極めた津の近くには仁徳天皇の難波高津宮、孝徳天皇の難波長柄豊碕宮、聖武天皇の難波宮が造営され、都が大和から遷都した時の宮殿である。難波津の所在地ははっきりしていないが、宮殿のあった上町台地の近くであろうと考えられる。

犬養孝氏は、撰津国として万葉に所出の地名を延べで六十を数えると言い、さらに古代では播磨五泊と言う、と記している。難波から兵庫県室津まで約百キロであるから、一日平均は二十キロ程の行程になる。あるいは悪天候の日もあるし、潮待ちの日もあるのであるから、それらを勘案して五泊が相場であったのかも知れない。住吉には男女が集まり野遊びをしていたことなどが「住吉の小集案」（巻十六・三八〇八）などの歌語で知られ、雅な世界を含み持つ住吉の神がいる場所である。

瀬戸内海に限らず、むしろ外洋ではとりわけ風に拘るの

は、途中に寄港地がなくて長距離を走る等の条件が重なるからでもあろうし、梶だけでは対馬海流を乗り越えて壱岐・対馬、あるいは新羅に渡ることの困難さを自覚していたからでもあろう。一九七五年の野性号では、対馬海峡で漕走による渡海が失敗した。むしろ一枚が人間一人の漕走に匹敵する力を得ているのであるから、好き風を得ることが外洋では大切になる。

オランダ商館船は、風が良ければ潮流にも逆らっているが、もちろん負けてしまつて流されている場合もある。無風であれば曳舟も利用している。一日に二百キロも進むこともあり、四十キロ程度のこともある。下関から大坂まで所要日数は、寛永十八年、十九年、正保元年、正保三年、正保四年、承応元年等を参考にしてみれば六日から八日程度の行程である。もちろんシーボルトなどの一行の旅は、文政九年（一八二六）二月二十二日下関に到着して、さらに大坂到着が三月十三日である。これなどは調査旅行のためにはわざわざ日数を費やしている例外的なものである。

これは、国家的な行事で決まつた宿泊場所に泊まらざるを得ない条件の違い、加えて御馳走場所で上陸して文化交流も果たさなければならなかつた使命は、オランダ商船にはなかつた。しかし、帆船としての能力と夜でも果敢に航

海するオランダ人との違もあるであろう。七日、九日、十五日などは船旅をきらつたという迷信も江戸時代にはまだあつたらしい。瀬戸内海で大事なものは、風であり、潮流であることはごく常識的である。ただ、夜の航海と言うことでは、江戸時代でも和船において瀬戸内海でオランダ船同様に果敢に試みられていたとは思えない。

私は、遣新羅使の夜の船出は、一つが夏の昼間であれば暑さとの闘いもあり、猛暑をさけたことと、もう一つがそれぞれの国で船員の交代があつて、その夜も航海するという意気込みを示したのである、と考えている。夏の暑さの説明は必要ないが、船員は主要な船頭などを除き、国家的なことであり、それぞれの国の船員が担当しているのである、と考える。安芸は安芸の船員が、周防は周防の水手が担当したのであろう。備後と安芸は、その意味では、月夜の航海をして心意気をも示したのであろう。ところが、月が陰り、突風が吹くと恐ろしい波が立つ。その恐ろしさが使人に次の歌をうたわせたのである。

26 山のはに月傾けかたむばいざりする海人の燈火沖になづさふ
(十五・三六二三)

IV 山陽道 安芸

安芸と備後で山陽道に触れた歌はないが、地名がたまたま記録された。筑前の国守であつた山上憶良が安芸の駅家うまやを歌に取り入れている。それが、「高庭」である。参考のために題詞・序、そして歌を紹介する。

また、古代の山陽道も西国街道と同じく、山陽高速道路廿日市ジャンクションの南にある四郎峠を経て大野町に入り、高畑を経て大野浦駅そばを通っていたとして、高畑に「高庭」があつたと考え、万葉集歌人山上憶良の歌碑もそこにある。



高庭の万葉歌碑

高庭駅家

熊凝くまこりがためにその志を述ぶる歌に敬つつしみて和する六首（并せて序）筑つち前まへ国くに司つかさど守まも山上憶良
大伴君熊凝は、肥ひ後の国みちの益城郡の人なり。年十

八歳にして、天平三年六月十七日を以て、相携すまひのつかり使つかし某国あるくに司官位姓名つかさかんいせいめいの従人となり、京都に参る向かふ。天に幸あらず、路に在りて疾を獲、即ち安芸あきの国佐伯郡高庭くさへきのこほりの駅家うまやにして身故りぬ。終りに臨む時に、長嘆息ながなげひて曰く「伝へ聞く、仮合けがふの身は滅易く、泡沫はうちうの命は駐み難しと。所以ゆえ、千聖も已に去り、百賢も留まらず。況や凡愚の微しき者、いかにしてか能く逃れ避らむ。ただ我が老いたる親並に庵室いはりに在す。我を待ちて日を過ぐさば、自らに心を傷いたむ恨みあらむ、我を望みて時に違はば、必ず明を喪ふ泣を致さむ。哀しきかも我が父、痛きかも我が母。一身の死に向かふ途は患へず、ただ二親の生よに在す苦しびを悲しぶるのみ。今日長としへに別れなば、何れの世にか覲みゆること得む」といふ。乃ち歌六首を作りて死ぬ。その歌に曰く、うちひさす 宮へ上ると たらちしや 母が手離れ常知らぬ 国の奥かを 百重山 越えて過ぎ行きい つかも 都を見むと 思ひつつ 語らひ居れど 己が身し 勞はしければ 玉梓たまはこの 道の隈くまに 草手折り 柴取り敷きて 床じもの うち臥ふいて伏して 思ひつつ 嘆き伏せらく 国にあらば 父取り見まし 家

にあらば 母取り見まし 世間は かくのみならず
犬じもの 道に伏してや 命過ぎなむ（一に云ふ「我
が世過ぎなむ」）（五・八八六）

たらちしの母が目見ずておほほしくいづち向きてか我
が別るらむ（五・八八七）

常知らぬ道の長手ながてをくれくれといかにか行かむ糧かひはな
しに（一に云ふ「干飯かれひはなしに」）（五・八八八）

家にありて母が取り見ば慰むる心はあらまし死なば死
ぬとも（一に云ふ「後は死ぬとも」）（五・八八九）

出でて行きし日を数へつつ今日今日と我を待たすらむ
父母らはも（一に云ふ「母がかなしさ」）（五・八九〇）

一世には二度見えぬ父母おちいを置きてや長く我が別れなむ
（二に云ふ「相別れなむ」）（五・八九一）

【口語訳】 光が輝く朝廷に上ると（たらちしや）母の
手を離れ、普段経験しない国の奥深い 沢山の山を越
えて過ぎると いつしか都を見たいと 思いつつ語ら
いつついたけれど、わが身が損なわれたので（玉ほ
この）道の傍らで 草を刈り 柴を敷いて 仮の床で
身を横たえ 思いつつ嘆き横たえることは、国なら父
が看護して 母が世話をするだろう。世の中とはこん
なものなのか。犬のように 道に伏して 死ぬのであ

ろう。（吾が命は過ぎるのであるうか。）

【口語訳】（たらちしの）母にあうこともなく、心も晴
れずどちらに向いて私は別れるのであるう。

【口語訳】 いつもと違う長い道のりを、暗闇のなかをど
のように行こう。食料もないのに。

【口語訳】 家で母が世話すれば、慰められるころにな
るのに。もしも死んだとしても。（その後に死んだとし
ても。）

【口語訳】 出かけていった日を数えつつ、今日か明日か
と待つのであるう。父や母らは。（母の悲しいことよ。）

【口語訳】 一度だけの宿世には再び逢えない。父母を後
に残して、わたしは永遠の別離にしまうのであるう。
う。（お互いに別れるのであるう。）

古代の国道一号線は、幅が十メートルもある山陽道であ
る。およそ十五キロ間隔で道の駅が設けられ、国の重要な
人の交通と物の流通に関わった。広島では、高庭駅（たか
にわ・たかば）という名前が万葉集に登場している。それ
に対して瀬戸内海は海の路といえる。神島、鞆の浦、長井
の浦（糸崎）、風速（風早）、長門島（倉橋島）などが固有
名詞で登場している。瀬戸内海の言語文化として瀬戸内海

風土に関わる古代文学がある。また巖島を核とした平家の栄華もあった。公家文化の延長でありながら鄙の地である安芸文化が輝いた。伊勢の斎宮でも王朝文化が花開いていた。安芸は近世には頼山陽も活躍した。近代の小説家として志賀直哉・林芙美子の尾道は有名である。しかし、その尾道も足利時代からの繁栄を誇る港町である。広島も尾道も中世、近世から栄えた。瀬戸内海は、日本の地中海である。

芸藩通史の古跡には、万葉の高庭に触れる箇所がある。高庭と音の類似を指摘して、しかし結論は否定したのが、大竹市栗谷町谷和（だにわ）説である。標高四百五十メートルの山上にある盆地であるが、水の豊かな盆地である。現在二十件ほどの農家が点在している。

そもそも駅家とは、大宝令を参考に説明される。原則として、三十里（十六キロ）ごとに一駅を置き、人馬を継ぎ立てて宿と食を提供する所である。山陽道は、馬を二十四置いていたことを、令義解が記している。時代別国語辞典上代編には、馬家と国衙・郡衙と一致することが多い、ともある。万葉集の「高庭の駅家」の所在については、永尾幹三郎氏が『佐伯万葉史の研究』で詳細に論じている。下田忠氏は、『万葉の歌人と風土（中国・四国）』で新説（一

〇六から一〇七頁）として紹介している。下田氏は、永尾氏の説を「天堂の地は熊凝の霊を祀るために建てられた殿堂の名が地名になったのではないか。…濃脛駅は天堂の山、野貝山にもとづく」として、「嗜濃郷の嗜は正の字と同じなので、対岸の正之（野）原が濃郷の中心だったろう」と纏め、新説の紹介にとどめて後考をまつとした。私は、濃脛（のお）を万葉の高庭に近い高い場所と考える。高庭とは、台地を指していると考えからである。

永尾氏の最大の功績は、安芸の府中から岩国までの山陽道を検証しようとしたことにある。これまでは、中世の道を参考に、和名抄を配慮して古代山陽道を推し量っていた。ここでは万葉集で歌われた天平三年（七三一）の山陽道を理解することである。律令が完成したのは、大宝律令（七〇二）であり、八世紀のはじめである。大化の改新（六四五）から半世紀以上を経て、初めて律と令が完成したのである。山陽道は、完成といえる状態がいつのことなのである。辛酸をなめた土木工事が毎年施工されたであろう。安芸の国衙の府中から西は、延喜式（十世紀）に伴部（伴前原）、大町（利松か安古市大町か）、種篋（平良）、濃脛（のお）、遠管（私案（をたけ））と書いてある。三十里が駅家の行程であれば、府中町から岩国までがJRで四十キロ

ていであることから、途中に二駅が必要である。それが三駅であることは、途中で大きな寄り道を余儀なくされたからである。種篁が平良（廿日市）であれば、高庭、或いは古代では直線的な感覚で安芸の道は考えられない。峠をいくつも超える山陽道最大の難所が安芸であつたはずである。駅家の数十三は、一国で最大の数に近い。

安芸府中から西の駅家は、伴部、種篁、濃畠、遠管、そして周防国石国につながっていた。

現在一般的な書物での山陽道の駅家で紹介する廿日市下平良と大野町高畑（濃畠）間も距離的に近すぎるので、これも例外的な駅家である。濃畠を天堂、もしくは廿日市市津田、あるいはその周辺の玖島であれば、適当な距離であり、峠を越えているのであるから当然の場所に駅家があつたことになる。そこで濃畠が「野貝」である説が永尾氏によつて提示された。廿日市の中心部平良から野貝山を越えた玖島にある天堂を濃畠駅家と考える案である。古代の安芸の国における山陽道は平良からは海岸線を通つていなかったことになる。周防の最東端は、石国駅家であり、場所が岩国市関戸になる。

その場合濃畠と遠管がいったどこにあつたのか、ということである。深い溪谷、大きな川筋には道はつけなかつ

たという。その基本的な考えから、遠管を大竹市栗谷と永尾氏は考えている。理由は、小瀬川の弥栄溪谷をさけて道を配慮していることと栗谷谷和（くりたにだにわ）を交通の要所としていることである。

私は、天平時代の八世紀は、広島廿日市は瀬戸内海に面した山陽道がなかつた、と考える。それが、十世紀に太田川の河口に体積大地が広がり、伴から石内を経て廿日市平良にいたり、海岸線を避けてのうが高原を越えてから石国（岩国）に通じていたと言うことである。これは、十世紀頃までは山陽道の基本には宮島の対岸線を避けていたこと、そして安芸国が最大の難所であつたこと、さらに遠管が調を減じられるほど疲弊していたこともある。峠としては、のうが高原と四百五十メートルの谷和の間は比較的平坦であることから、古代の山陽道として適当である。

大野町高畑が万葉の高庭駅家であるというのは、天平年間の山陽道が大野権現山、野貝山、笠山、などの北にある盆地を通つていたとする説が有力であれば、まったく推論に妥当性を欠くことになる。広島が江戸時代に飛躍的に発達して、さらに明治以降盛んに埋め立てが行われたのであるから、そろそろ中世がそうであれば、古代も同様であるなどという歴史の連続を今一度、山陽道に関しては見直す

ことが肝要である。私は、芸藩通史に指摘して、わざわざ否定している大竹市栗原谷和近辺を遠管とし、その周辺で馬二十頭、人百人ほどが生活できる土地がもつとも可能性のある土地に考える。

古代の山陽道は、内陸盆地を通過して粟谷谷和を経てから小瀬川を渡り、岩国関戸に出たと考える。弥栄溪谷を避けることと同様に經小屋山のせまる廿日市市大野海岸を、或いは四十八坂を越えることを避けるのが道路の管理から妥当であると考ええる。

宮島と經小屋山の南斜面は、急峻であり、巨石がごろごろ見え隠れしていて、道路をつける困難と維持する労苦を覚える。

その廿日市市大野町が豊かな大地に変質していくのは、太田川の平野が開拓され、八幡川流域に干拓で農地が広がり、さらに宮島が信仰の対象になっていく必要がある。

『広島県の歴史散歩』（三〇頁）では、八七五年の遠管駅の駅子の調を免除したことに触れ、大野・大竹間が古代でも難所であったことを示すとする。ここでいう大野は、根拠がない。延喜式にある駅家「遠管」は、「をたけ」と訓み、それは大竹の古い名称である、と考えた。

私は思いつきを述べた。しかし、根拠は音の類似である。

濃畛と野貝は、音が近い。また野貝の「かひ」とは貝・峽である。川の名前としても適当であり、その源流が野貝山すなわちのうが高原である。「のうが高原」の「が」は霧が峰、窓が山の「が」と同じであり、濃畛の山を意味する。

古代の山は川の源流としての意味があり、川の名前が山の名称になったのが「野貝（溪）山」であった可能性もある。

「たかには」と「だにわ」「だには」は、音が類似しているが、「庭」とは、平坦な場所を指す言葉であるから、台地的な場所をいったとも考えられる。また谷和の村史が歴史的に奈良時代までさかのぼれなくても、大竹から岩国、あるいは佐伯への交通の要所であり、小瀬川を越えて周防岩国に行くにも、濃畛である野貝山の北にある玖島に行くにしても、要の標高四百五十メートルの台地であり、必ず通過する峠である。気がかりなことは、谷和であれば、その近くの栗谷などを含めても、「遠管」の馬家が果たして馬二十匹、そして人を養うだけの石高が保証できたか、という事柄である。駅家としての経済的な背景が交通の立地条件だけでは維持できなくなっていたことが芸藩通史等の大鋸里の資料からは、想像される。

万葉集の研究は、天曆五年（九五二）に梨壺の五人坂上望城、紀時文、大中臣能宣、清原元輔、源順に勅命があつ

てから始まる。古点といわれ、次点、新点と続く。源順は、和名抄の著者でもある。そして、現代では全国の大学をはじめとして、万葉学会、上代文学会などの研究組織もある。その組織には、大学院生を含めてそれぞれ会員を擁している。以上、古代の言語文化である万葉集の約三十首が広島県に関わっていることを縷々述べた。

参考文献

- 『佐伯万葉史の研究』（溪水社 一九八四年）永尾幹三郎著
『万葉の歌人と風土（中国・四国）』（保育社 一九八六年）下田忠著

『万葉の旅 下』（社会思想社 一九六四年 改訂版平凡社）犬養孝著

『夜の船出 古代史からみた万葉集』（塙書房 一九八五年）直木孝次郎著

『万葉集全注（巻十五）』（有斐閣 一九八八年）吉井巖著

『万葉集釈注巻十五・十六（八）』（集英社 一九九八年）伊藤博著

『道の万葉集』（笠間書院 二〇〇六年）高岡市万葉歴史館編集

により、この著書ではさまざまな道を取り上げている。

『広島県の歴史散歩』（山川出版社 二〇〇九年）

朝鮮通信使の研究は、柴村敬次郎氏が下蒲刈町『ふるさと下蒲刈』に連続して公表されている。

『万葉を推理する』（日本発見万葉の里34）所収 一九七二年晩教育図書）そこでは中西進氏と松本清張氏の対談が載せられていて、松本氏の江戸時代の国東半島日出藩参勤交代資料の存在を紹介している。ルートは、日出―上関―松山という海路である。

額田王の八番「熟田津に」は、歌語の「月」と「潮」にも解釈の相違があり、定説はない。「額田王論」（『セミナー万葉の歌人と作品（一）初期万葉の歌人たち』和泉書院 一九九九年）で平舘英子氏が研究史を踏まえて詳しい。

拙論「遣新羅使の船出―長門の浦から麻里布へ―」（『広島女学院大学日本文学』二〇〇六年第十六号）で、遣新羅使の夜の航海に触れた。

『広島県史古代中世資料編Ⅰ』（広島県 一九七四年）一〇六頁に、延喜式兵部省の駅家の地名が紹介されている。

備後 安那 品治 者度

安芸 真良 梨葉 都宇 「宇」鹿付 木綿 大山 荒

山 安芸 伴部 大町 種寛 濃畠 遠管

なお、広島県の万葉歌碑所在地を紹介する。万葉歌の石碑で検索すれば、インターネットで簡単に写真は、見ることができる。

広島県の万葉歌碑一覧

福山市

2-141、3-446、

5-822、6-1009、

10-1864

広島大学付属福山中学校万葉植物園

3-446

福山市鞆町対潮楼下バラ園

3-447

福山市鞆町の浦歴史資料館前

7-1182

福山市鞆の浦後山展望園地

1-12423

福山市蔵王森林公園

1-53599

福山市西神島町西神島神社

尾道市

1-53613

尾道市因島公園

1-53598

尾道市千光寺文学のこみち

三原市

1-53614

三原市糸崎糸崎神社

東広島市

1-53615、3-616

東広島市安芸津町祝詞山八幡神社

広島市

3-291

広島市安芸区上瀬野久井原交差点

呉市

1-53617、3-624

呉市倉橋町宮浦万葉公園

1-53621

呉市倉橋町倉橋神社

1-53621

呉市倉橋町万葉植物公園

1-53617

呉市倉橋町松原白華寺

1-33243、3-244

呉市阿賀町大空

1-94094

呉市長上迫町海軍墓地※三カ所

廿日市市

5-890

廿日市市大野高畑薬師堂